

「宇佐にゆかりの作家と作品」展



12. 石川武美 1887-1961
『わが愛する生活』(主婦之友社・1940)

13. 五所平之助 1902-1981
『自作を語る』『お化け煙突の世界』
(ノーベル書房・1977)

11. 清水基吉 1918-2008
『宇佐にて』『日矢』・1999)



14. 丹生義孝 1906年～?
『黒猫判事』(丹生義孝・1985)

16. 双葉山 1912-1968
『機綱の品格』(ベースボール・マガジン社・2008)
※原題『相撲求道録』

15. 都留重人 1912-2006
『いくつもの坡路を回顧して』
(岩波書店・2001)



17. 板坂元 1922-2004
『創立百年記念 学校史』
(宇佐高校・1997)

19. 豊田有恒 1938年 -
『夢の10分間』『USA騒動記』
(講談社文庫・1979)

18. 木村久運典 1923-2000
『個性派将軍 中島今朝吾』
(光人社・1987)



21. 宮城谷昌光 1945-
『古城の風景』47 横須賀城
(新潮社・2007)

20. 池内紀 1940-
『川を旅する』『石の橋』
志良川(大分県)(筑摩書房・2007)

22. 小川照郷 1947-
『裂けた月』
(ランダムハウス講談社・2008)

「宇佐にゆかりの作家と作品」展

ごあいさつ

今回は、国民読書年の記念として、宇佐出身の作家、ゆかりの作家、あるいは、宇佐が舞台になっている作品などを集めてご紹介する展示を企画しました。

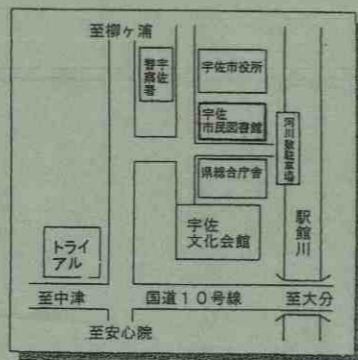
作家といっても、必ずしも文人だけに限定せず、評論家や出版人ほか、他分野の人物をも含め、関係する作品のある22名を取り上げました。

どんな出身作家が、ふるさとへの思いをどのように描いているか。宇佐のどんなところが、どんな作家の創作意欲を刺激したのか。その一端を味わっていただければと思います。

今回取り上げた作品は、すべて図書館で読むことができます。新たな読書のきっかけになれば幸いです。

平成22年(2010)9月11日

宇佐市民図書館
渡綱記念ギャラリー



平成22(2010)年9月11日/編集・発行 宇佐市民図書館
大分県宇佐市上田1017-1 TEL.0978-33-4600

「国民読書年」記念企画

2010
国民読書年

「宇佐にゆかりの作家と作品」展



1. 夏目漱石 1867-1916
宇佐神宮の俳句『漱石俳句集』(岩波文庫・1990)

2010.9.11~10.10

10:00~18:00(日曜のみ ~17:00)
休館日…毎週月曜日・月末木曜日

宇佐市民図書館
渡綱記念ギャラリー

「宇佐にゆかりの作家と作品」展

人と作品



2. 司馬遼太郎 1923-1996
「大徳寺散歩 中津・宇佐のみち」
『街道をゆく34』『宇佐の杜』（朝日新聞社・1990）



3. 松本清張 1909-1992
『陸行水行』（文春文庫・1975）



4. 阿川弘之 1920 -
『雲の墓標』（新潮文庫・1956）



5. 城山三郎 1927-2007
『指揮官たちの特攻』（新潮社・2001）



6. 内田康夫 1934-
『はちまん』上・下（角川書店・1999）



7. 横光利一 1898-1947
『旅愁』（講談社文芸文庫・1998）



8. 種田山頭火 1882-1940
句碑 宇佐市四日市/清水寺



9. 高浜年尾 1900-1979
句碑 宇佐神宮境内

10. 高野素十 1893-1976
句碑 小菊寮

「宇佐にゆかりの作家と作品」展

紹介内容から

1. 夏目漱石 宇佐での俳句『漱石俳句集』（岩波文庫・1990）
宇佐に行くや住き日を選む初曆／蕭条たる古駅に入るや春の夕
元（ごつ）として鳥居立ちけり冬木立／神苑に鶴放ちけり梅の花
ぬかづいて日く正月二日なり／松の苔鶴瘦せながら神の春
南無弓矢八幡殿に御慶かな／神かけて祈る恋なし宇佐の春
呉橋や若菜を洗ふ寄藻川

2. 司馬遼太郎「大徳寺散歩 中津・宇佐のみち」
『街道をゆく34』『宇佐の杜』（朝日新聞社・1990）
西方の中津から東方の宇佐までは十余キロで、途中、古墳が多い。
「うさ」は、ふるくは菟狭（『日本書紀』）あるいは宇沙（『古事記』）とも書
いたが、奈良朝あたりから宇佐に統一されたらしい。
小丘陵が多く、みるからにゆたかそうな小平野である。古代もそうだった
し、いまでも県下第一の穀倉地帯だという。
この小平野を沖積させて、むかしもいまでも潤わせている川の最大のものは、
宇佐の駅館川である。名が、おもしろい。

3. 松本清張『陸行水行』（文春文庫・1975）
この宇佐駅からさらに北へ向かって三つめに豊前善光寺という駅がある。
そこから南のほう、つまり山岳地帯に支線が岐れていて四日市という町まで
行っている。この辺は山に囲まれた所で、さらに南に行けば、九州アルプス
の名前で通っている久住高原に至る。四日市の駅で降りると、バスは山路の
峠を走るが、その峠を越すと山峡が俄に展（ひら）けて一望の盆地となる。
早春の頃だと、朝晩、盆地にも霧が立ち籠め、墨絵のような美しい景色とな
る。
この地名は安心院と書いて「あじむ」と読ませる。

4. 阿川弘之『雲の墓標』（新潮文庫・1956）
二月一日
午前、飛行作業。いくらか空中観念をとりもどして来た。風ほとんどなし。
ほそい銀色の駅館川、周防灘、国東半島、南は別府湾、すべて薄がすんで、
春の立つ気配である。空からの眺めをたのしむ余裕も多少出来て来たようだ。
午後雨になる。飛行作業ヤメ。雨、夜までふりつづく。

5. 城山三郎『指揮官たちの特攻』（新潮社・2001）
兵学校出身者や予備学生から成る飛行学生や、飛行予科練習生（予科練）
は、茨城県の土浦や霞ヶ浦での練習機による教育を終えると、戦闘機や陸上
機要員を除く多くがここに来て、急降下爆撃を行なう艦上爆撃機（略して「艦
爆」）や、同じく水平爆撃や雷撃を行なう攻撃機（略して艦攻）などに乗り込
んでの訓練を短い期間に集中的に受ける。
つまり、海軍用語で言う「実用機教程」をこなし、修了の次の日でも戦闘
に参加できる乗員に仕立て上げるための航空隊なのであった。
このため、選りすぐった教官・教員が集められて居り、「鬼の宇佐空」「地
獄の宇佐空」などといわれるほど、密度の濃い訓練が積み上げられ、海兵団
や練習航空隊とは空気がちがった。

「宇佐にゆかりの作家と作品」展

紹介内容から

6. 内田康夫『はちまん』上・下（角川書店・1999）
「それより、その神風特別攻撃隊がどうしたんですか？」
「そうそう、それでですね、その宇佐航空隊の神風特別攻撃隊には、出撃ご
とに隊名がつけられていたんです。その名前が何だったと思いますか？」
浅見のキラキラ光る目で覗き込まれて、美由紀は少し反らしぎみにして、
首を横に振った。
「分かりませんよ、そんなの」
「それがなんと、『八幡護皇隊』とか、『八幡神忠隊』とか『八幡振武隊』と
いったように、全部『八幡』がつくんですよ
「えっ……」
美由紀にもようやく、浅見の興奮の意味が伝わった。

7. 横光利一『旅愁』（講談社文芸文庫・1998）
「城山というのはどの山ですか。」
と訊ねてみた。低い幾つもの峰が平野の方へ延びて出ている中央の、一番
高まった峰をさして農夫はあれだと答えた。寺へ着いてから村人たちの出で
来てくれた後では、彼の想い描いていた場所をひとり静かに歩いてみるこ
とも出来そうになく、まだ知られぬ今の中に、彼は先祖の呼吸し、眺め暮して
滅び散った館の跡を見て置きたいつもりであった。

8. 種田山頭火 岩かげまさしく水が湧いている（宇佐市清水寺句碑）
秋の空高く巡査に叱られた（宇佐市四日市門前広場句碑）
9. 高浜年尾 薫風や国を護りの神として（宇佐神宮境内の句碑）
10. 高野素十 夏山の重なり合へる余生かな（小菊寮の句碑）
11. 清水基吉
横光利一誕生百年祭 夜の秋の星合ならぬ師父祭る（宇佐にて）

◆ ◆ ◆
【書籍】
司馬遼太郎『街道をゆく34』『大徳寺散歩 中津・宇佐のみち』
単行本と文庫本（朝日新聞社・1990/1994）
松本清張『陸行水行』（文春文庫・1975）
阿川弘之『雲の墓標』（新潮文庫・1956）
城山三郎『指揮官たちの特攻』（新潮社・2001）
内田康夫『はちまん』上下（角川書店・1999）
横光利一『旅愁』戦前版（3冊本）と戦後版（4冊本）ともに改造社
『石川武美全集』全6巻（石川文化事業財団・1980）
石川武美が創刊した「主婦之友」創刊号（1917・2）
五所平之助の句集『五所亭句集』（牧羊社・1966）
双葉山『横綱の品格』（ハースト・ルマガジン社・2008）
清水基吉主宰・編の俳誌「日矢」（ひや）※「宇佐にて」連載
（1999・10～12）
板坂元『人生後半のための知的生活入門』（PHP文庫・1994）
板坂元『アメリカ診断』（講談社・1978）
板坂元『紳士の美学』（PHP研究所・1995）